「ご当地」大好き!

ご当地ラーメンやご当地カレーなどのご当地グルメ、ご当地キューピーやご当地キティなどに代表されるご当地グッズ、ご当地検定などなど、「ご当地」と冠することばが今あちこちにあふれています。その地域ならではのもの、つまり「ご当地」ものがこの数年ブームになっています。人びとが今、なぜ「ご当地」ものに夢中になるのか。どういったものが人気なのか。今号は、ご当地ブームの様子やその背景にあるものをレポートします。

地域の文化、再発見!

この数十年、交通機関の発達や技術革新の進展により、どこにいても簡単に情報が手に入り、同じ商品を手にできるようになりました。ある意味で、さまざまな面で画一化が進んでいるということができます。しかし、その地域ならではの文化も根強く残っています。

文化の地域による違いは、もともと各地の地理や気候風土、歴史、物資の流通経路などさまざまな要因によって生じたと考えられます。例えば、南北に細長い日本は、各地の気候風土は大きく異なります。また、日本では国土の約7割を山や森林が占め、川も数多く流れています。交通機関が発達していなかった時代には、海に近いか、広い川に接しているか、山に囲まれているかといったことが文化に大きな影響を与え、さまざまな違いを生みました。

このような日本の地域の多様性に、テレビをはじめとするメディアが着目し、地域独自のもの、つまり「ご当地」ものを紹介するようになりました。あるテレビ番組は、ご当地ものを、食べ物や習慣などさまざまな面から取り上げ、人気を集めています。番組の視聴者は、自分が当たり前だと思っている食べ物や習慣が、実はその土地ならではのものであったり、同じ料理でも地域によって材料や食べ方が異なっていたりと、さまざまな違いを発見し、その違いに楽しみを見出しているようです。

地域発信

1950年代半ばから1970年代初めにかけての高度経済成長は、工業化と都市化をもたらしました。地方では、都会に多くの人が出て行き、高齢化、過疎化が進みました。過疎化にはどめをかけ、地方を活性化させようと、地方の行政や経済界はいろいろな策を講じています。例えば、1980年代に大分で始まった「一村一品運動」(各市町村で特産物を一つ作ろうという運動)は、全国にも広がりました。また、写真や映画などの大会やフェスティバルを開き、文化発信することで地域の活性化を図っている自治体もあります。さらに、1980年代後半、当時の竹下登内閣は、「ふるさと創生事業」として、3,300の自治体に対して、それぞれ1億円を交付しました。この1億円の使途は自治体に任されました。この政策は賛否両論ありましたが、1億円を地域の活性化のために有効に使った自治体もありました。

ご当地検定

最近は、その地域の歴史や文化、産業などに関連した問題を出題する「ご当地検定」が各地で行われています。2004年に始まった京都・観光文化検定試験(通称、京都検定)は受験者数が1万人近くに上るなど、ご当地検定ブームの先鞭を付けました。今では、数え切れないほどのご当地検定があります。2006年にはNintendoDSのゲームソフト「ご当地検定」が発売されました。各都道府県にゆかりの問題が出題されています(http://www.spike.co.jp/gotouchi/main.html)。

ご当地検定は、その地域の人たちにとって、その地域の良さを見直すきっかけにもなっているようです。(関連:『ふるさとを知る、伝える』)

高校生による商品開発

地元の高校と企業が連携して、その地域の特産物を使った食品を開発し、販売するケースも増えています。例えば、北海道留萌千望(るもいせんぼう)高校と地元の製麺会社、水産会社が協力し、生地に餅米を練り込んだ「もっちり米パスタ」、「ニシンそぼろ」を商品化しました。

© 彦根市

ひこにゃん

ゆるキャラ

自分の地域をアピールするために、多くの地方自治体が独自のマスコットキャラクターを作っています。これらのマスコットはゆるキャラ[*1]と呼ばれ、最近とても人気があります。2006年に、彦根城築城400年を記念して作られた「ひこにゃん」が大人気となり、ひこにゃん見たさに多くの観光客が滋賀県彦根市を訪れました。ひこにゃんは、地域の活性化に一役かって注目を集めました。2009年10月には、「ゆるキャラまつりin彦根〜キグるミさみっと」が開かれ、全国から109体が勢ぞろいしました。この3日間のおまつりの期間中に訪れた観光客は7万2000人に上りました。

http://kigurumi.shiga-saku.net/

*1 ゆるキャラ:コンセプトもデザインもすべてがゆるく、見ている人をなんとなく癒してくれるようなキャラクター。イラストレーター、みうらじゅん氏の命名によるもの。

ご当地グッズ

駅や高速道路のサービスエリアなどには、その地域の特産物やお土産品が多く売られています。最近、若い人を中心に人気があるのが、その地域限定のご当地グッズやご当地スナック菓子です。

ご当地グッズのなかでも特に人気があるのが「着ぐるみキューピー」や「ご当地ハローキティ」などです。これは、全国的によく知られたキューピーやハローキティが、その地域の特産物や名所、人物などをかたどった衣装を着たものです。こういったキャラクターの文具やハンカチなどもあります。1998年に「ラベンダーハローキティ」が発売され、現在では1,000以上のご当地ハローキティが発売されています。そのほかにも、ディズニーのキャラクター、ミニーマウスやスティッチのご当地版もあります。こういった全国的に有名なキャラクターだけでなく、その地域に関連したものをモチーフにしたその地域だけの商品も人気があります。

これらは、その地域に行かなければ手に入らないものであるがゆえに、高い人気を誇っています。

ご当地グッズ

© 1976,2009 SANRIO CO.,LTD,APPROVAL NO.S503076

コスチュームキューピー® © ONLY-ONE

食べもの

食文化も地域によってさまざまに異なりますが、大まかな傾向があります。違いの境界線ははっきりと決まっていないものの、東日本と西日本では味の嗜好が違うようです。例えば、肉は東では豚肉、西では牛肉が多く消費されます。また、出しや醤油の好みも異なります。

食品メーカーの中には、地域の食文化を考慮して商品を開発しているところもあります。日清食品のカップ麺「どん兵衛」は、かつお、昆布、しょうゆを使った基本のつゆは同じですが、東日本ではかつおの割合を多くし、濃口しょうゆで仕上げ、西日本では昆布の割合を多くし、しょうゆは薄口を用いているそうです。

同じ料理それとも別の料理？

雑煮も食の違いの例としてよく取り上げられます。雑煮は、野菜や魚介、肉などの材料を煮た汁に餅を加えた料理で、ほとんどの地域でお正月のお祝いの料理として食されます。まず大きく違うのは餅の形です。東日本は角餅、西日本では丸餅を入れます。さらに、東北、関東、九州はすまし汁、関西はみそ味です。具は地域によってさまざまですが、その土地の産物を入れる場合が多く、たとえば秋田の山菜、宮城の魚介、広島の貝類などが特徴的です。

どんなお雑煮？

秋田

すまし汁。わらび、ぜんまい、姫たけのこ、きのこ、ふきなどの山菜が入っている。

岩手

すまし汁。雑煮に入っている餅は、くるみだれにつけて食べる。くるみだれはすったくるみに砂糖としょうゆで甘辛く味付けしたもの。

宮城

すまし汁。焼き干しにしたハゼやいくらなど海産物が入っている。

東京

すまし汁。小松菜、大根、人参、鶏肉などが入っている。

三重

すまし汁。ハマグリ、里芋、しいたけ、小松菜などが入っている。

鳥取

写真の雑煮はみそ仕立ての汁に黒豆が入っている。あずき汁の雑煮もよく食べられる。

香川

みそ仕立て。あん入りの餅が入っている。大根、人参などが入っていることもある。

鹿児島

すまし汁。えび、鶏肉、青菜、しいたけ、人参、もやしなどが入っている。

広島

すまし汁。はまぐり、かき、塩ブリなどが入っている。

長崎

すまし汁。塩ブリ、タイ、かき、鶏肉、くわい、昆布、ごぼうなどが入っている。

ことば

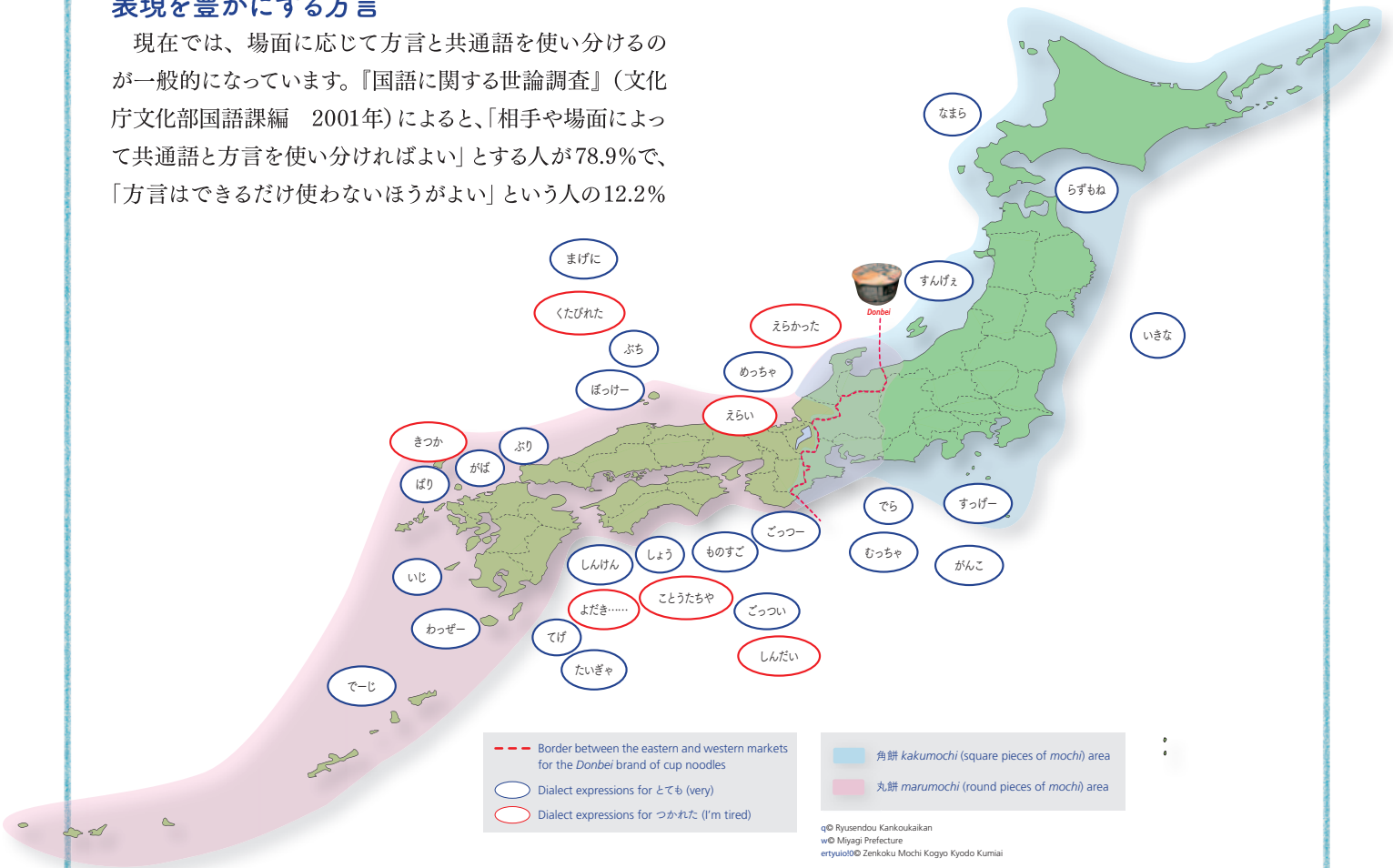
関西弁、鹿児島弁、栃木弁、津軽弁……。地方、県、地域など、その分類の仕方はさまざまですが、実にたくさんの方言があります。イントネーションやアクションにその特徴が現れたり、ことばそのものが共通語とは全く違っていたりします。その方言でしか微妙なニュアンスが表せないことばもあります。

しかし、少し前まで、「方言」は恥ずかしいもの、かっこ悪いものという意識をもつ人が多くいました。学校教育でも、第二次世界大戦後しばらくの間、方言を共通語に正そうとする指導が行われていました。テレビの普及とともに共通語が普及し、伝統方言が衰退していくと、方言を見直す動きが出てきました。

表現を豊かにする方言

現在では、場面に応じて方言と共通語を使い分けるのが一般的になっています。『国語に関する世論調査』（文化庁文化部国語課編　2001年）によると、「相手や場面によって共通語と方言を使い分ければよい」とする人が78.9%で、「方言はできるだけ使わないほうがよい」という人の12.2%を大きく上回りました。方言は親しい相手との会話など私的なコミュニケーションの場において、仲間との連帯意識を高めたり、自分のアイデンティティを表現したりするものとして、言語生活を豊かなものにしているといえます。

また、近年、方言を積極的に使おうとする動きも出ています。方言を使う劇団やお笑い芸人も出てきています。さらに、テレビ番組で方言を取り上げるものが増えたりしたこともあって、数年前には、首都圏の女子高生の間で方言ブームがおきました。友だちとの会話やメールで、いろいろな地域の方言を取り混ぜて使うといったものでした。方言が仲間との暗号のように使われたに過ぎなかったという批判もあった一方で、ことばの多様性に目を向けるのはいいことだとする意見もありました。



ふるさとを知る、伝える

なつき

ふゆき

ふゆき……特定非営利活動法人「ふるさと小松検定」＋事務局長
なつき……特定非営利活動法人「ふるさと小松検定」副事務局長
石川県立小松商業高校３年

Q: 特定非営利活動法人「ふるさと小松検定」（以下、「小松検定」）のメンバーになったきっかけは何ですか？

ふゆき：1年生と2年生のとき、「ふるさと小松検定探訪ツアー」という、小松商業高校の生徒が企画して地元の人たちに小松の名所旧跡を案内する活動に参加しました。それまであまり知らなかった小松のことを知ることができて、とてもおもしろい経験でした。それで、3年生になるときに、「小松検定」に参加することにしたんです。

なつき：わたしは、先輩たちから「小松検定」の話を聞いて、地域の人と交流できるのがおもしろそうだと思いました。「小松検定」に参加してもっと地域の人と関わってみたいと思いました。

ふゆき：「小松検定」の事務局長は、先生にすすめられて引き受けました。これまでも、生徒会の会計をやったことがあります。事務局長の仕事は大変そうだし、ちょっと悩んだんですけど、こんな経験はなかなかできないと思って、やってみることにしました。

なつき：わたしも先生に誘われました。悩んだんですけど、副事務局長になったら地域の人とさらに関わることができるし、自分も成長できるんじゃないかと思って引き受けました。

ふゆき：いろんなことを頼まれやすいんですよ、二人とも！

なつき：そういう顔をしてるんじゃないですかね（笑）。ふゆきさんはしっかりしていて、頼りになって、とてもおもしろい。いろんな面で助けられています。

ふゆき：なつきさんは、わたしのことをすごく甘やかしてくれるんですよ（笑）。わたしがなにか作業をしていて「できなーい」って言うと、すぐ「わたしがやるよー」と言って助けてくれるんです。

Q: どういう活動をしていますか？

ふゆき：事務局はおもに、ポスターやちらし・問題を作成する班と、ウェブサイト作りをする班に分かれています。11月に検定試験があるので、問題作成班はいま問題作りをしています。わたしたちは、二人ともウェブサイト制作班で、いまはウェブサイトの作り方を勉強しているところです。

なつき：ほかに、今年の検定試験の問題のネタを探しに出かけたりもします。この前は、小松駅の近くに残っている町家（写真参照）を訪ねて、町家保存会の人に説明してもらいました。わたしたちは事務局長と副事務局長なので、県庁などに提出する事業報告書や会計書類なども作ります。それから、地元の新聞の取材を受けたりもします。特定非営利活動法人の歴史や意義、運営については、学校の授業でも勉強しています。

町家は、江戸時代から昭和の戦前にかけて建てられた、商人や職人の住宅。 http://www.city.komatsu.lg.jp/pre/machiya/k-koma-index.html

Q: 二人は「小松検定」のどの級をもっているんですか？

二人： 1年生と2年生のときに初級を受けましたけど、2回とも落ちました！（爆笑）先生たちでもなかなか中級に受からないくらい難しいんです。それに、ちょうど簿記や情報、ワープロ、旅行業務など、就職に有利になる資格試験の時期と重なったので、「小松検定」はあまり勉強もしないで受けちゃったんです。

Q:「小松検定」の活動をしていて大変なことってありますか？

ふゆき：ウェブサイトをつくるためのタグを覚えるのがすごく大変です！ 同じようなタグがいくつもあって、ひとつ覚えたと思ったらすぐにひとつ忘れちゃうんです。特定非営利活動法人の書類作りも大変ですけど、ほとんどなつきさんが書いてくれて、わたしはハンコを押すだけなので……（笑）間違えずに、きれいにハンコを押すのもけっこう難しいんですよ！

なつき：大変なのは、やっぱり書類作りです（笑）。先生に教

えてもらいながら作るんですけど、書類を作るのは初めてだし、正式な書類なので文章も難しいし、書くこともたくさんあって、本当に大変でした。でも、今ではずいぶん慣れました！

Q：じゃあ、おもしろいことは何ですか？

ふゆき：わたしは、さっきなつきさんが言った町家見学がおもしろかったです。家の柱や壁のクギを、ちょっとした飾りもので隠したりしていて、そういう工夫のしかたがとてもおしゃれだと思いました。いろんな人の意見が聞けるのも楽しいです。たとえば、授業を受けない先生とは普段は話す機会がないですが、「小松検定」をとおして、いろんな先生の考え方とか人となりを知ることができて、親しみを感じられるようになりました。

なつき：やっぱり、「ふるさと小松探訪ツアー」がおもしろかったです。これまで知り合う機会がなかった地元の人たちと親しくなることができました。ツアーの前には、学校の近所や駅前でビラを配って地元の人たちの参加をよびかけたりしました。小松のどこを案内したらみんなに楽しんでもらえるか、いろいろ考えるのもおもしろかったです。去年のツアーには、地元の人たちだけでなく、学校交流をしている大阪の高校の生徒10人も参加したんです。わたしたちも、かれらが企画する大阪ツアーに参加して、大阪のコリアンタウンとか牧場に連れて行ってもらいました。「小松検定」のおかげで、普通に学校生活を送っているだけでは経験できないようなことを経験できると思います。

Q: これからどういうことをしていきたいですか？

ふゆき：お祭りなどで、地域の人に「小松検定」を宣伝するのが楽しみです。小松検定クイズなどをやって、たくさんの人を楽しませたいです。これから11月の試験に向けて、事務局全員でいっしょに作業をすることが多くなると思います。事務局長として、みんなが意見を言いやすい雰囲気をつくりたいと思います。みんなが楽しくできるように、普段から人の意見をちゃんと聞くようにしています。

なつき：わたしも、お祭りなどで小松の人たちと交流するのが楽しみです。副事務局長として、ふゆきさんをしっかりサポートしたいと思ってます！（笑）

ふゆき：甘やかされてますねー（笑）。

Q：高校卒業後はどういうことをしたいですか？

ふゆき：わたしは簿記が好きなので、経理や会計の仕事がしたいです。たとえば、会計の精算表は答えを出すためにたくさん計算をしなくてはいけなくて、ものすごく手間と時間がかかります。でも、答えをすぱっと出せたときは、とても気持ちがいいんです！　地元で仕事をしたいと思っています。県外は、ちょっとこわいです。大阪はまだ身近な感じがするけど、東京はちょっとこわい。できれば、これまで自分がずっと生活してきた土地にいたいです。

なつき：わたしは、県外に出ていろんなところで友だちをつくってみたいなあと思った時期もありますけど、今は地元で就職したいと思っています。わたしも、都会は人が冷たいイメージがあって、ちょっとこわいなあ。金融系の会社で働きたいと思っています。もし銀行で働くことになったら、地域の人とも話す機会が増えると思うので、地元のことがもっとわかるようになるんじゃないかなあと思っています。

（取材は、2009年8月に行いました。）

「ふるさと小松検定」とは

2005年に始まった「ふるさと小松検定」の活動は小松商業高校の3年生が中心となって運営されている。目的は、①ふるさと小松を再発見し次の世代に伝えていくこと、②ふるさとを知り、ふるさとから学ぶ活動を行うこと、③ふるさとへの愛着を深め、地域のつながりを広げること。2008年にはNPO法人となった。毎年1回検定試験を行っていて、上級編、中級編、初級編がある。2008年までの4回で、合計7,042人が受験し、2,756人が合格した。事務局がつくった試験勉強のためのテキストと問題集もある。検定試験の企画・運営・広報のほか、地域の人向けのIT講習会なども行っている。現在の事務局メンバーは16人。公式ホームページ http://www.tvk.ne.jp/~kshs/

わたしの好きなもの

好きなことば

ふゆき： 温故知新
昔のものがあるから今のものがあると思います。

なつき： 十人十色
一人ひとり個性があって、みんな違うという考え方が好きです。

好きな食べもの

ふゆき： カレー

なつき： 桃

好きなこと

ふゆき： 読書

なつき： 音楽を聴くこと